## 武士の装いと刀剣

# 武士の服装・意識の変遷とともに変化発展した打刀拵の意匠

拵とは刀の外装のことを指し、鞘や鐔、柄、その付属品の総称をいう。鎌倉から室町時代末期まで主流であった太刀拵（刃が下向きになり腰に下げる）に変わり、安土桃山時代から江戸時代に入ると打刀拵（刃が上向きになり腰に差す）が主流となった。多種多様な意匠の打刀拵が造られた歴史的背景を考察する。

文・伊藤三平（刀剣史研究家）

「衣冠」。従四位以上の大大名の礼服。衛府太刀を佩く。江戸中期の有職故実家（古来の武家の行事、作法などの研究者）の第一人者であった伊勢貞丈が記した「武家装束着用之図」より。武士の服装とともに、刀の差し方なども詳細に記されている（国立国会図書館蔵）。

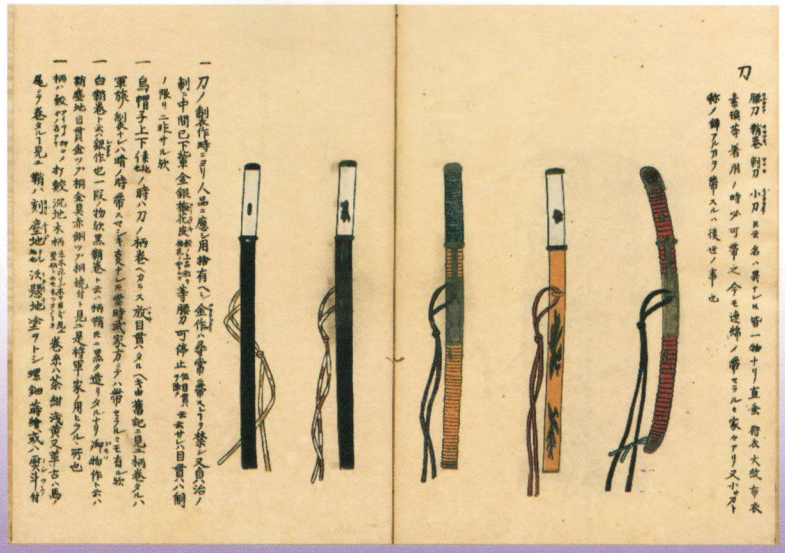
### 拵はファッションの一部 フォーマルな拵とは

拵は戦闘時には軍装品だが、平時には武士のファッションの一部である。ファッションとは、ある時点において人々の間で流行しているスタイルや風習で、服装、装身具、美容（理容、髪型、化粧）なども含まれる。拵は装身具であり、衣服との調和が不可欠である。

そもそも上級武士に打刀拵が広まったのも戦闘方法の変化ではなく、室町期の大紋、素襖の礼装に代わり肩衣小袖が主流になった服装の変化に対応したためとされる。

服装にはフォーマルとカジュアルがあり、公式の場では身分に応じた服装・拵が必須であり、江戸時代には高位の武士は官位に応じて佩用する太刀拵の種類（衛府太刀、糸巻太刀など）が定められていた。

一般の武士も裃での登城や冠婚葬祭の場では裃指（番指、献上拵、御城指）と称される拵が基本となる。鞘は



江戸時代の武家官位の服装、そして刀の拵の作法を記した、本間百里著「服色図鑑」（国立公文書館蔵）。

## 天正拵

**溜塗打刀拵（明智拵）　東京国立博物館蔵**
戦国時代に生まれた天正拵を代表する明智拵の一作。武士の実用に応えた造りで、武将明智光秀の気骨がにじむ拵となっている。

Image: TNM Image Archives

## 慶長（桃山）拵

**朱塗金蛭巻大小拵　東京国立博物館蔵　重**
豊臣秀吉が佩用した大小の刀の拵で、華やかな桃山拵。鞘は朱漆塗の上に金の薄板を蛭巻とし、柄の頭や鞘の鐺には金無垢の金具がつけられている（大・総長94・9㎝、小・総長61・9㎝、重要文化財）。

Image: TNM Image Archives

## 献上拵

**黒呂色塗竹雀紋金具献上大小拵　個人蔵**
上杉家の当主が家督を継いだ時に用いた格調高い大小拵で、大は無銘行光、小は無銘大進房が納められている（写真／図録『崇高なる造形　日本刀』都留市博物館刊より）。

黒呂色、柄は白鮫の上から黒の柄糸で菱に巻き、頭は黒塗りの角、縁と小柄、笄は赤銅魚子地に定紋色絵である。各藩や藩士の身分や財力によって小異が出る程度である。下げ緒の色で身分を示す藩もあった。フォーマルな装いだけに、汚れは恥で年末に柄糸を巻き直していたのである。

この手の黒呂色鞘の拵は江戸時代を通して武士身分の家に必ず存在した。黒の礼服と同様に個性は感じられない拵である。

### 天正拵・慶長拵　高級武士の個性発揮

天正拵とは戦国時代に生まれた打刀拵を称している。数少ないながらも現存しているのは、寺社への奉納品や、藩祖や高名な武士の差料として大事に伝えられてきたからである。徳川家康の助真拵や明智左馬助光春の明智拵、厳島神社の西蓮の拵などが知られている。中・下層クラスの武士や庶民の拵は法隆寺の西円堂の奉納物に残っているが、魅力のあるものは少ない。

安土桃山時代は、侘び茶の流行と同時に黄金の茶室が生まれた時代である。この時代の高級武士の拵は慶長拵（桃山拵）とも称されるが、豪華で美的センスに優れたものである。

豊臣秀吉の朱鞘に金の板を蛭巻きにした金蛭巻朱塗大小拵（P87―22参

# 御国拵の概要

御国拵も時代潮流や佩用者の身分、財力、好みによって差異がある。例えば鮫鞘は贅沢品で高位な者しか許されていない藩もある。また拵の構成要素のそれぞれに細かい掟があるが、ここでは柄や鞘などの外観からわかる特徴的な点を著者なりの視点でまとめておく(文／伊藤三平)。

| 御国拵名 | 特徴 |
|---|---|
| 肥後拵 | 影響を与えた人物:細川三斎、宮本武蔵 |
| | 細川三斎が実戦体験に茶道の風雅の精神を加えて考案した数種の拵が本歌である。研出鮫鞘で白と黒の自然な点描が出て、鐺には鉄金具がつく。柄は短めで、頭は丸みがあり、縁より小さい。柄下地の鮫には黒漆をかけ、鹿の燻べ革(薄い茶色)で柄巻きしている。実戦的な感じがする中にも、落ち着いた華やかさがあり、耐久性にも優れている。肥後金工の金具で味わいがある。宮本武蔵の武蔵拵(二天拵)もある。武蔵は剣だけでなく、絵や鐔造りにも才能を発揮している。肥後拵は、幕末に江戸を中心に大流行し、江戸肥後、仙台肥後、川越肥後などの呼称が生まれる。流行の理由は不明だが、肥後藩は赤穂浪士に対する扱いが良かったことが知られ、人気が高い藩であったことも一因と考えられる。 |
| 柳生拵<br>尾張拵 | 影響を与えた人物:柳生連也厳包 |
| | 連也は新陰流の達人と同時に自ら考案した柳生鐔を造り、庭造りでも妙を発揮した。連也の柳生拵は、鞘は黒呂色塗の三分刻みで、鐺は深めの四分一金具が付き、先端は角張っている。柄は短めで頭は縁より小さい。目貫は一般の据え方ではなく表目貫を頭の方、裏目貫を縁の方に寄せる。また目貫部分が高く盛り上がらないように下地を削るなど、柄の手持ちに留意している。浅黄色の柄糸で巻く。尾張藩士は柳生鐔を愛好し、尾張拵も柳生拵をベースにしている。 |
| 庄内拵 | 影響を与えた人物:松平権十郎親懐、菅善太右エ門実秀(共に幕末の藩重臣) |
| | 庄内藩の拵は本来は質実で地味なものだが、幕末に江戸市中取締役の松平権十郎が伊達者で、彼の拵が銀の総金具で朱鞘という派手さで喧伝される。黒鮫研出しの堅刻の鞘に革柄といった渋好みの江戸肥後拵風の拵も愛用したが、これは藩士の間で流行する。菅実秀は突兵拵風を好み、柄や鞘に鰐皮を張り、柄も鞘も金で長覆輪にし、一つの環金を腰元につけて栗形の代用にしている。庄内藩は戊辰戦争では幕府方として敗軍になったが、薩長と互角に戦っている。江戸薩摩藩邸焼討事件にも関わっており、戦後の厳しい措置を覚悟したが西郷隆盛の寛大な措置に救われ、西郷ファンになった人物が多い。 |
| 薩摩拵 | 影響を与えた流派など:示現流、薬丸自顕流、薩摩藩士風(抜いたら相手を殺すか自分が死ぬ) |
| | 士風から、滅多なことでは刀を抜かず、いざと言う時には鞘ごと抜けるような工夫(鞘の帯止用の返角を滑りやすくし、鐔に鞘と結ぶ孔があるなど)がされている。示現流のトンボの構え(顔の横に上段の剣を構える)から、鐔が耳や頭部に当たらないように小さい鐔になるなどが特色である。薩摩藩は士族が多い分、軽輩の者が多く、柄下の鮫の代用に牛や馬の皮を使うものもある。柄は長く、縁も大きく腰が高く、鐺に武骨な金物というのも多い。 |
| 仙台拵 | 影響を与えた人物、流派など:不明。伊達者の語源との説もあるが質実剛健、江戸時代初期の様式を持つ。 |
| | 仙台藩の平常差の拵。質素を旨とし、柄は頭と縁に比して中程が細く、頭が縁より小さくなる。柄下地の鮫皮に黒漆をかけたものが多く、柄糸または柄革にも黒漆をかける。金具は国元のものを使うように指示されていて、鉄地に綸子、山水、草花を金象嵌した地元製。鞘は黒漆塗り、朱鞘にするなら、赤い5分幅の筋を左巻きにして5つ巻くように定められていた。 |

(注)『日本刀大百科事典』(福永酔剣著)の各拵の項や、『庄内金工名作集』の佐藤寒山氏の著述、『薩摩拵』(調所一郎著)、「刀剣美術」297～299号所載の「尾張拵(含柳生拵)に就いて」(坂入真之著)などを参考にする。

照)、前田利家の雲龍蒔絵朱塗大小拵、黒田孝高の青漆金霰鮫拵は青(緑)漆の鞘に金板を霰のように叩き出したものを貼っている。

侘び茶の文化を反映した拵が細川三斎の信長拵、歌仙拵、希首坐拵などで、研出鮫鞘に柄下地の鮫を黒く染め、柄糸は燻べ革が基本であり、これらが肥後拵(P87-24参照)のお手本となっている。

この時代の武将は当世具足に異形兜で自己顕示欲を衒いも無く発露していた。拵も同様で、拵から佩用している人物を推察した秀吉の逸話を『常山紀談』(湯浅常山著)は伝えている。

「秀家(宇喜多)は美麗を好むが故黄金を鏤めたる刀これなるべし。景勝(上杉)は父の時より長剣を好めり。寸の延びたる刀これに当たりき。利家(前田)は又左衛門といひし時より先陣後殿の武功により、今大国を領すれども昔を忘れず。革巻たる柄の刀、これ他の主にあらずと思へり。輝元(毛利)は異風を好む、異る体に飾なせる刀これならん。江戸大納言(徳川家康)は大勇にして一剣を頼むの心なく。取繕ひたる事もなく又美麗もなき刀其の志に叶ひたり」と述べた話だ。

当時の高級武士の拵は用いる人物の性格を彷彿させるように個性的であり、魅力的である。

自己顕示を自由闊達に表現する風潮が行き着く先に放縦無頼があり、江戸時代初期には「かぶき者」、江戸時代前期には「旗本奴」「町奴」という異風なファッションで乱暴狼藉を行う反社会的集団が生まれる。幕府は何度も禁令を出し、刀装では長大な刀に大鐔や大角鐔、そして朱鞘、黄漆鞘、白檀鞘、梅花鮫鞘や紅の下げ緒などを具体的に禁止している。旗本奴には白柄組、赤柄組があり、このような派手な拵で闊歩していたのである。これら集団が好んだ拵は、禁令に抵触するものであり、現存していない。

## 寛文・元禄後半以降の拵カジュアルな拵の動向

長命の幕臣新見正朝が享保17(1732)年の82歳時に著した『八十翁疇昔話』の中で「昔(寛文頃)は、差す人の年齢や、体力、好みで、刀・脇指の長短、重量はそれぞれ違っていたが、元禄の後半からは、拵も細いのが流行れば、みな細くなり、鞘も平たいのが流行れば、みな平たくなるという状況となり、時代に合わせて造り替えないと流行に遅れてしまうという風潮になった」と記している。江戸時代前期までは佩用する武士の体力、好みが出た拵だったのが、元禄後半からは時代の流行(それも軟弱な風

# 肥後拵

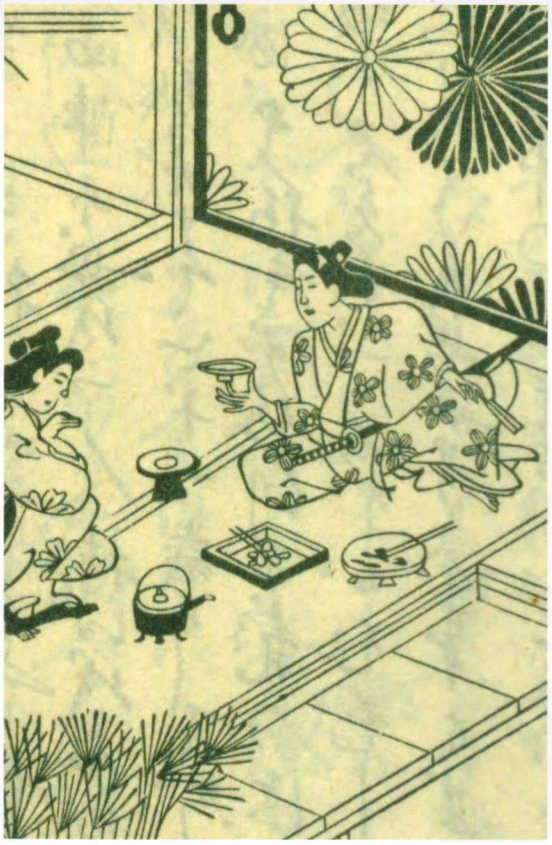
**鮫着研出刻鞘革巻柄肥後拵　個人蔵**

細川三斎の「信長拵」の形式を踏襲。細川家の何代目かの当主の差料と考えられる名作である（写真／図録『崇高なる造形　日本刀』都留市博物館刊より）。

潮）に影響を受けて画一的な拵になったことが理解できる。

江戸時代は元和の武家諸法度から武士に倹約を求めているが、寛文3（1626）年の諸氏法度に「兵具の外不可道具好」とあるように、兵具に分相応に凝るのは是認されていた。場にふさわしいカジュアルな拵（平常指）を時代の潮流、ライフスタイルの変化（役職、年齢、財力など）で作り替えていたわけだ。徳川吉宗が鷹狩り時に佩用した梅花鮫鞘拵が格好良くて、大名・旗本に流行したとの話も伝わっている。

なお、江戸時代は町人も脇指一本は指せた。井原西鶴の『好色一代男』（天和2年刊）には大尽の拵として「七所（縁、柄頭、目貫、折金、栗形、裏瓦、笄を揃いの図柄で造ったもの）の大脇指で、少し反りがあり、藍鮫を鞘にかけ、鉄の古い鐔の小型のものをつけて、柄は長くして、金の四目貫を用いる。それに鼠屋製の藤色の下げ緒を附けている」との記述がある。もちろん普通の町人の道中差しなどは粗末なものである。



『絵入好色一代男』（井原西鶴著）より。同書には、大尽が所用していた拵として「七所」の豪華な大脇指がという描写がある（国立国会図書館蔵）。

元禄期以降に刀装金工の名工が数多輩出してきて、拵の金具類を金工作品で飾ることが一般化してくる。鞘の種類（塗り、刻み方、貼る材質など）だけで数百種あり、柄糸の色や織り方、巻き方など組合わせは千差万別となる。凝った美しい拵も生まれたが、鞘は傷付き、破損しやすく、柄糸も摩耗する。付属の金工作品が価値あるものだと拵から解体されて伝わることになる。現存している衣装が少ないように、この時代の魅力的な拵も少ない。

なお平常指の中に御国拵と呼ばれるものがある。肥後拵の他に、尾張拵、薩摩拵、庄内拵、仙台拵などが知られている。加州拵の記録もあり、影響力のある大藩で、その土地に金工流派がいた地には存在した可能性が高いが、大勢に同調する風潮の中では小異として埋没したのであろう。なお鍔には尾張、加州、肥後、水戸、薩摩、大坂、庄内、川越などの名称が残っている。

主な御国拵の概要はP87-23の表のとおりである。

## 洋風ファッションにも影響された幕末の拵

安政2（1855）年に幕府の武芸教習所の講武所が設立され、そこに通う幕臣子弟のファッションが講武所風として流行し、講武所拵も人気になる。長い刀身で、柄も長く、柄糸は白で幅の狭いものを小菱に巻く。縁頭は銀無垢か金象嵌で家紋、鞘は朱鞘、小尻は鉄という目を惹くものだったが所詮は格好優先であり、数年で廃れた。

幕末には西洋風衣服を軍装としてフランス式軍隊調練が広まる中で、サーベルに似た突兵拵と言う鞘尻が次第に先細りになり、ゆるく尖っているものが流行して明治の廃刀令を迎える。過去の遺物になった日本刀と拵が、軍刀拵として近代兵器の中で過ごすことになるのは日本民族の遺伝子によるものだろうか。